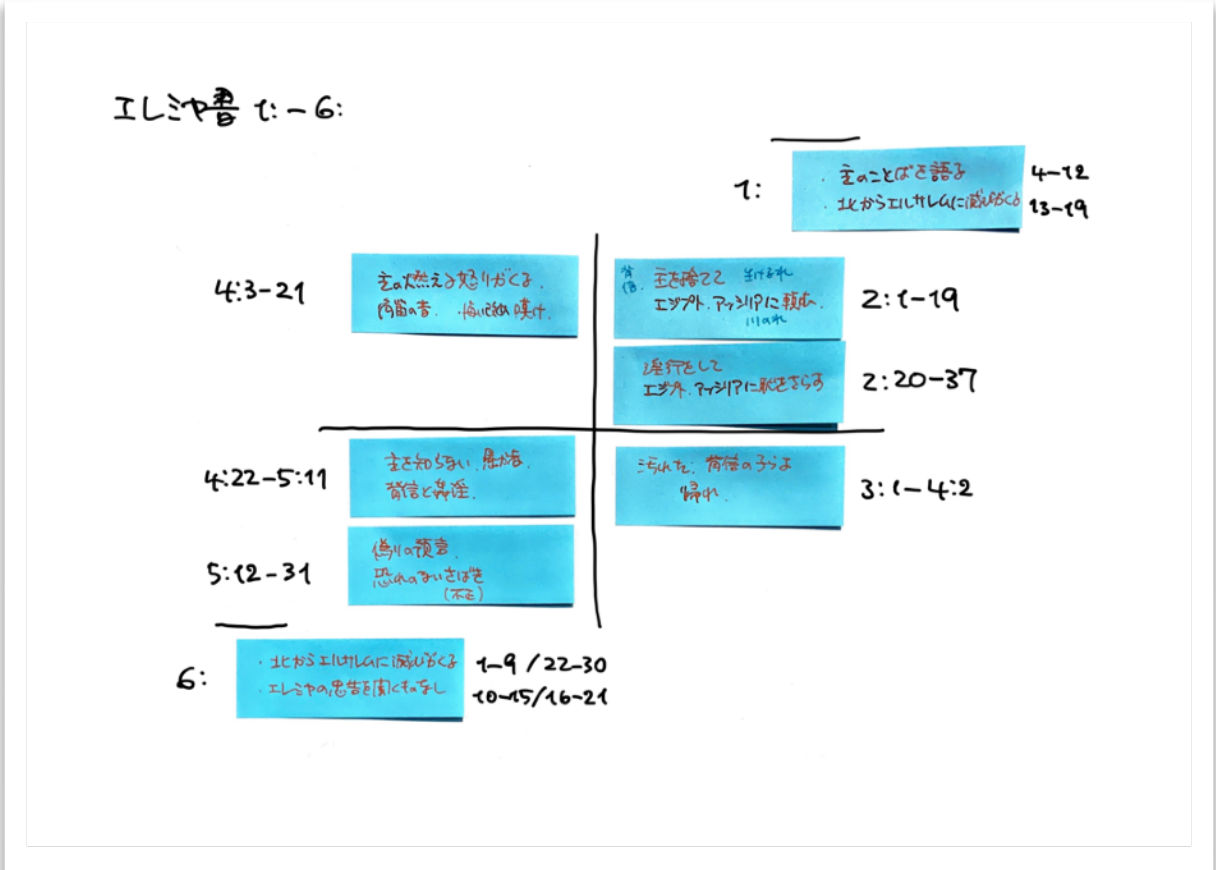
# エレミヤ書　2: 4:22-5:




エレミヤ書1章から6章の中の、2章1節から2章37節までの2つの段落と、4章22節から5章31節までの2つの段落、この4つについて特にその関係を見てみました。

1章から6章は、エレミヤが主のことばを語る者として選ばれるというところから始まります。主のことばを語る。それと、北からエルサレムに滅びが来る、さばきが来るという2つのことが中心でした。6章のこの段落の終わりのところは、エレミヤの忠告を聞かない、聞かないので北から滅びが来ます。誰も聞く人がいない、忠告を聞く人がいないというところで終わります。全体としては、主のことばと、北から来るさばき。国によってさばきがもたらされる、異邦の国によってさばきがもたらされるという敵の国と、主のことばというのが、全体の流れでした。主の言葉を聞いて帰れとという段落(表右側)と、主の燃える怒りが来るという、4章3節からの角笛のところです。その内容、帰れと行ってどこから帰るのかというのが、この2つ。主の燃える怒りが表わされるのが、この2つ(4:22~5:11、5:12~31)です。

まず最初にこちらの2つ(2:1~19、2:20~37)を見ます。2章1節からと、2章20節から。並行しているところが、ナイル、ユーフラテス、エジプト、アッシリア。アッシリア、エジプト。最初のこの2つの段落をそれぞれ2つずつに、大体分かれてたりしますけれど、これも4つの段落と見ることができると思います。ここ(2:1~19)が2つ(2:1~9、2:10~19)、ここ(2:20~37)が2つ(2:20~28、2:29~37)に分かれるということです。

全体として、ここ(2:1~9)は、エジプトから連れ出された、主を忘れている、主を捨てている、主を忘れている。次の段落(2:10~19)が、他の国に仕える、主を捨てたのですけどその主を捨てて、今度は他の国々により頼む、他の国に仕えたい。捨てたことを忘れて、それで他の国々に行くというのがこの段落。

2章20節からのところは、どちらも「はずかしめを受ける」。26節に、はずかしめを受ける、36節に、はずかしめを受けるということを言われていますけど、この(2:1~9、2:10~19)段落の、主を捨てて他の神々に仕える者は何をしているのかというと、そのやったことを認めないというのが、この2つ(2:20~28、2:29~37)かなと。汚れている、バアルと淫行を行う他の国が欲しい、他の国のようになりたいという思いですね。その汚れを行っているのに、それを認めない。神様を忘れて、主を捨てるという罪を犯しているのに、その罪を認めないというのがこちらの段落ですね。この2つ(2:1~19、2:20~37)の段落の中には、「荒野、暗黒の地、花嫁、忘れる、花嫁について覚えている」というキーワードで、この並行も分かるように書かれていると思います。「主を忘れている」「国に仕えたい」「汚れを認めない」「罪を認めない」ということなので、この外側のところ(2:1~9、2:29~37)は、主に対して、じゃあ国々に対してどうしてるかというような並行が(2:29~37、2:10~19には)あると思われます。

次に、4章22節から、5章12節からのところの2つの段落は、それぞれ2つになって、4つの段落として見ることができると思われます。1(4:22~5:2)、2(5:3~11)、3(5:12~19)、4(5:20~31)と、4つの段落に分けています。ここ(1と3)に「私はことごとくは滅ぼすことはありません」という言い方。終わりのところで(2と4)「こういうことのために罰しないということをしないでいられようか、このような国民にあだを返さないということはあろうか」というこの言い方がありますので、ababという繋がりが見えるというはずだということですね。

こちら(4:22~5:2)は、天地創造の逆みたいな感じなのですけど、荒地になっている。もともと造られたものなのに、荒地、荒野になっている。荒らされている女と。創造されたのに、主の怒りによって元に戻されてしまった。次の段落(5:3~11)は、主に、そのさばきが来て怒られているのに、「痛みを覚えず懲らしめを受けることを拒み、悔い改めることを拒む」。知らない、主の道を知っていると言いつつ知らない。主を捨てて淫行を行っているという、主を知らない、悔い改めないというのがこの段落ですね。

次に12節から(5:12~19)のところは、「他の国、知らない、言葉を知らない、悟ることもない」。何を言ってるか分からないような言葉の国、異邦の国の攻撃が来て滅ぼされます。それは「主を捨てて、自分の地、土地で異なる神々に仕えたので、他の地で異なる国に仕えるようになる」というように言われています。他の国に支配される。次の段落(5:20~31)は、そのようなさばきが来ているのに、この人たちは「恐れない、おののかない、恐れようとしない、恐れがない。不正なさばきをしても、不義の宝で満ちている」というような言い方がされています。

主を知らない、悔い改めない。悔い改めないどころか、さばかれても恐れがない。全く悔い改めない状態がここに現れていると思います。こちら(4:22~5:2)は、怒りによって荒野になっている。こちら(5:12~19)は、神様の怒りによって国々に滅ぼされるという御怒りが来ているというつながりですかね。

今見た2章からと4章22節からのどちらの段落にも、最初の出だし(1章)にある主のことばを聞くのか、聞かないのか。滅びが来るという警告に対して、どう応答しているのか、どういう滅びが来るのかというようなことが、この中で何度も繰り返されて、有罪

だということが、残念ながら証拠として言われているというような段落になっていると思います。